

まえがき

授業では、教師の発問による豊かな話し合いが基本となります。教師がよい発問をすれば、子どもたちの「問い合わせ」が示す学習内容への到達に切実さが増し、学びへの意欲は高まります。

よい発問とは、「考えたい」「話し合いたい」というように、子どもたちを能動的にする発問のことです。したがって、「わかつていていたと思っていたことがわかつていなかつた」「当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかつた」というように、知的好奇心を揺さぶる発問を考えることが大切です。

また、考えがいくつかに分かれるような発問を考えることも大切です。発問に対する反応がみんな同じなら、話し合う必要はありません。考えが分かれるから自分の考えが正しいのかどうかが気になり、意欲的な学びを引き出すことができるのです。そして、話し合いを通して迷つたり揺れたりして試行錯誤するうちに、一人では体験できない多様な学びも体験することができます。

このように、発問のよしあしは授業がうまくいくかどうかに大きく関係します。そこで、本書では国語授業を成功に導く発問のテクニックと文章のジャンルに応じた発問術について書いてみました。本書が読者のみなさんの国語授業づくりに少しでも役立てば、うれしく思います。

最後になりましたが、本書を書くにあたっては、編集部の根津佳奈子さん、新留美哉子さんにたいへんお世話になりました。また、齊藤明子さんにはすてきなイラストを描いていただきました。ありがとうございました。

まえがき 3

「JRをおさえれば上手くいって!」 国語授業の発問ルール

第1章

- 発問計画を立てる 12
- 三つのタイプの発問を使い分ける 14
- 主要な発問と助言を組み合わせる 16
- 正答に導くための助言を少しあつね 18
- 「あいまいなといふ」を見つけて発問化する 20
- 予想についてから発問する 22

- 正しく伝わるようであつくりと発問する 24
- 一度発問したが、同じ換えなし、くり返さない 26
- 最適な立ち位置で発問をしたり、子どもの発言を聞いたりする 28
- 発問と板書・ノートとを連動させる 30
- コラム 「発問」「指示」「説明」のはたらきのちがいを知り、使い分ける 32

国語授業がみるみる活気づく! 発問づくりの成功ポイント

第2章

- 興味・関心をもたせる「聞く」による 34
- 記憶を再生させる「聞く」による 36
- 資料を読み取らせる「聞く」による（説明文） 38
- 挿絵を読み取らせる「聞く」による（物語） 40
- イメージ化させる「聞く」による（物語） 42
- 学習課題を再考させる「聞く」による 44
- 子どもの思考の流れに沿った「聞く」による 46

全員参加をつくり出す 「問ひ」にする 48
ペアで話し合ひをさせる 「問ひ」にする 50
個別学習からグループ学習・全体学習へと導く 「問ひ」にする 52

【コラム】

発問によって授業に引き込んだり、思考力を育てたり、学習意欲を高めたりする

第3章 思考力をどうぞこねてみよう！

発問の展開術

55



- 「めあひ」を確認し、授業の「ホールを意識化させること」
一斉返答をさせて、定着度をつかむ 58
予想させる 60
図や表に整理させる 62
似た言葉や文と比べて、差異を読ませる 64
多様な考えを引き出す 66
矛盾・対立・葛藤を生み出す 68
選択させて、話し合ひを深めてせる 70

- 考えの理由や根拠を引き出す 72
文章を吟味させる 74
【コラム】 説明内容を発問化するよさとは 76

第4章 「深い学び」を引き出す！ 説明文の発問術

77

- 「問ひ」と「答へ」に着目させる 78
段落に着目させる 80
文章構成に着目させる 82
段落のまとまり（意味段落）に着目させる 84
文章構成図を書かせる 86
表に整理させる 88
段落じつしの関係を読みませる 90
文じつしの関係を読みませる 92
指示語に着目させる 94

接続語に着目させる	96
文末表現に着目させる	98
対比に着目させる	100
くり返しに着目させる	102
要点をまとめさせる	104
小見出しをつけ、大づかみさせる	104
要約させる	108
説明の仕方の工夫を見つけさせる	108
題名に着目させる	112
事柄の順序に着目させる	114
リライトさせる	116
「コラム4 よい発問とよくない発問のちがい」	118
	110
	106

第5章 「深い学び」を引き出す! 物語の発問術

119

場面に着目させる	120
文章構成に着目させる	122
文章構造表を書かせる	124
事件に着目させる	126
クライマックスに着目させる	128
設定に着目させる	130
語り手に着目させる	132
中心人物の変容に着目させる	134
会話文に着目させる	136
情景描写に着目させる	138
視点の転換に着目させる	140
くり返しに着目させる	142
対比に着目させる	144
比喩に着目させる	146
くり返しに着目させる	148
対比に着目させる	150
伏線に着目させる	152
表記に着目させる	154
題名に着目させる	156

主題に着目させる
物語を吟味させる

10



160 158

発問のルール 1

発問計画を立てる

●導入時、展開時、終末時の発問を考える

発問計画は、導入、展開、終末の授業展開に即して主要な発問を考えます。導入時では、これから展開される学習内容に関して興味や関心をもたせる発問、学習のねらいや学習課題を理解させる発問を考えます。例えば、物語「スイミー」(光村図書『こくご』上令和二年度版)でスイミーの人物像を読み取らせる学習では、「はじめの部分にスイミーが紹介されています。スイミーは、どんな人物でしょうか?」と学習課題を示す発問を考えます。

展開時では、子どもたち一人ひとりがもつさまざまな見方や考え方、解釈などを相互に出し合い、交流していくことによって、学習内容を身につけていく発問を考えます。例えば、物語「スイミー」では、「みんな 赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっくろ。」から、スイミーの「みんな」ことがわかりますか?」という発問を考え、「まっくろ」が否定的に使われていることに気づかせます。また、単なる黒色ではなく、「からす貝より」「まっくろ」と二重に黒色を強調していることに気づかせます。さらに、「一ぴきだけは」と「だけ」があると一ぴきが強調されていること、「赤い」と「まっくろ」が対比されていることなどにも気づかせます。

終末時では、学習のまとめをする発問、学習を振り返る発問、自己評価に関する発問を考えます。「自分一人では気づかなかつた考え、新しい考えを知ることができましたか?」という発問を考えます。

導入時、展開時、終末時の発問を考える

導入の発問

- ・学習内容に興味や関心をもたせる
- ・学習のねらい、学習課題を理解させる



はじめの部分にスイミーが紹介されています。
スイミーは、どんな人物でしょうか?

展開時の発問

- ・さまざまな見方や考え方、解釈などを出し合い、
交流することによって、学習内容を身につけさせる



「みんな 赤いのに、一ぴきだけは、からす貝
よりも まっくろ。」から、スイミーのどんな
ことがわかりますか?

終末時の発問

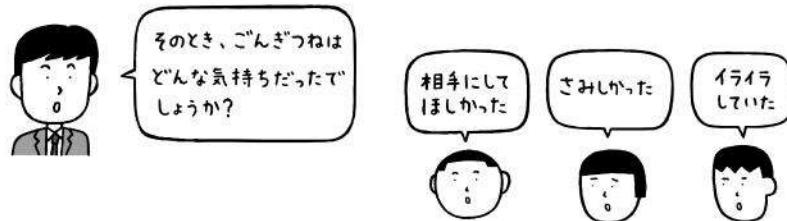
- ・学習のまとめをする
- ・学習を振り返り、自己評価する



自分一人では気づかなかつた考え、新しい
考えを知ることができましたか?

三つのタイプの発問の特徴をつかむ

A ゆれる発問：子どもの自由な思考を促す



B 大きな発問：問題提示や思考の方向を指示示す



C 動かない発問：子どもたちがすでに知っていることを整理する



● 発問のルール2 三つのタイプの発問を使い分ける

発問には、いろいろなタイプがあります。

大西忠治氏は、A 「ゆれる発問」、B 「大きな発問」、C

「動かない発問」の三つのタイプに分類しています（『発問上達法』民衆社）。

A 「ゆれる発問」は、子どもに自由な思考を促し、いろいろな疑問を生み出すことができます。つまり、自分の課題、問題のあり場所を発見させるのに役立ちます。しかし、何かをきちんと教えるためには有効ではありません。

B 「大きな発問」は、「ゆれる発問」と同じような性質をもっていますが、子どもたちの自由な思考を促すよりも、問題の提示や思考の方向を指示示す役割をもっています。しかし、この発問だけでは正答に近づけないので、助言（補助的な小さな発問）が必要になります。

C 「動かない発問」は、子どもたちがすでに知っていることを整理してあげたり、子どもたちが知らないことをこれから思考するための材料提供をしてあげたりすることができます。そのため、子どもたちの反応が活発になります。しかし、「動かない発問」は子どもたちの反応を操作しすぎて一つのワクにはめ込んでしまう心配もあります。そこで、これら三つのタイプの発問の特徴をしっかりとつかみ、教材研究と子どもたちに何を教えたいかということにもとづいて適切に使い分けることが大切です。